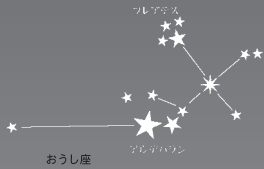


# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## われらの行先

夕張市医師会 会長 中條 俊博

昨年6月の定期総会で、16年の長きにわたり夕張市医師会会長を務められた築詰彰彦先生が後進に道を譲りたいとの御意向により会長に就任したが、あれやこれやと何かと責任のある立場となり、早速この原稿依頼の締め切りをすっぽかして担当の方にご迷惑をかけている次第である。人に誇れる趣味や文才もなく何を書こうかと迷ったが、やはり夕張に触れてみることにした。

わが町夕張は国策により誕生した町で、近代化を急いだ時の明治政府は石炭を最重要産業と位置付け、国の石炭産業の育成保護のもとに急激な発展を遂げ、九州の三池炭鉱に並ぶ代表的な炭鉱町となった。

住宅をはじめ水道、電気、浴場、病院、福利厚生も炭鉱経営企業に依存してきたため、自治体としての主体性や能力は脆弱で、圧倒的な北炭と三菱という巨大な支配により地域社会が形成されていった。昭和35年には人口約12万人というピークを迎えた後、エネルギー革命の名のもとに石炭から石油への転換が国策として進められ、炭鉱は次々と閉山へと追い込まれて人口も激減していった。

そして自治体としてのさまざまな政策の失敗のツケにより、平成18年に巨額な負債が明らかとなり自主再建が困難、翌年には財政再建団体に指定された。

わが夕張市医師会も昭和32年頃は会員数77名を誇っていたが、多くは数ある炭鉱病院の勤務医の先生たちであり、閉山とともに町を去らざるをえなくなってしまった。

会員数が道内一少なくなった当会としては、公益法人制度改革に伴い任意団体として存続していくことになったが、このような夕張市の抱えている状況やこれから待ち受けているであろう問題に難しい舵取りを迫られるかもしれないが、困難に立ち向かう強い意志を持たなければならないと思うのである。



## 病院管理職のボヤキ

三笠市医師会 会長 川崎 君王

病院の管理職をしてみると、今まで遭遇したことのない案件をこなさなければいけないことがよくあります。その時に結果が良い状態で終了することが常に求められます。初めてのことから、うまくことが運ばれるか分かりませんが、と言いたくなりますが、結果が良くなければ、困ることもあり、辛いことになります。

こういう時に経営者の名言に感銘を受けることがあります。

秩父セメント(現在は太平洋セメント)の社長であった諸井虔の言葉で、「経験は初めてのことをうまく行って、成功させることだ。要は初めてのことを体験して成功させないと、その案件のスキルは身に付かないということで、広く一般に失敗しても良い経験になったと言われる場合があるが、それではその案件のスキルは身に付き難い」と彼は言っていました。物事を施行して、なおかつそのスキルを会得する時の本質に迫る人生の先輩の示唆と言えます。

では上手にことを運んで、最後をきちっと決め、成功を得る時の状態。その時をどのように乗り切っていけるかを示唆するものはないかしてみると、へたな人生訓より参考になるものがありました。

高校生の時、古文で学習した徒然草の第九十二段に『初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、始めの矢に等閑の心あり。』と、書かれています。この一瞬の中に気持ちの緩みをなくすることが重要であることがこの段では述べられています。

病院の経営環境が難しくなりつつある現在の状況では、いろいろな考え方、捉え方を備え持つことが求められていることから、先人の名言等に妙に同感する今日この頃です。